フラワーガーデン

アジサイ花後の管理について

綾歌普及センター
井口里香

アジサイの花は、何と言っても梅雨の時期が一番似合いますよね。毎年たくさんの花を咲かせるためには、花後の剪定が大切です。今月は、アジサイのお話です。

アジサイの管理についてお話しする前に、アジサイについて少しご紹介しましょう。

●アジサイの仲間

アジサイ属の仲間は世界に四十数種あると言われています。主なものに、ガクアジサイ、ベニガク、アマチャ、ヤマアジサイ、シチダンカ、コアジサイなどがあります。近年、よく見る鉢物として、花形が大きく、花つきの良いヨーロッパ改良種・ハイドランジア（西洋アジサイ）があります。これは、日本のアジサイがヨーロッパで品種改良され、鉢物園芸品種として日本に輸入されたものです。

●適地

半日陰で、少し湿り気があり、腐植質に富んだ肥沃な土壌を好みます。特に乾燥を嫌うので夏の空中湿度には注意します。

●花芽分化

アジサイの花芽分化は気温が一八℃以下に下がる九月下旬～十月中旬ごろです。今年伸びた新梢のうち、よく充実した枝の頂芽か頂部に近い腋芽に花芽ができます。花芽分化した新芽は翌春に伸び出し、二〇～三〇㎝になるとその枝先に花を咲かせます。

●花後の剪定

花が終わりしだい、花の終わった枝を二～三節残して切ります。この時、込み合っている枝の間引きを行い、老化枝や細くて弱々しい枝は切り取って通風・採光を良くします。

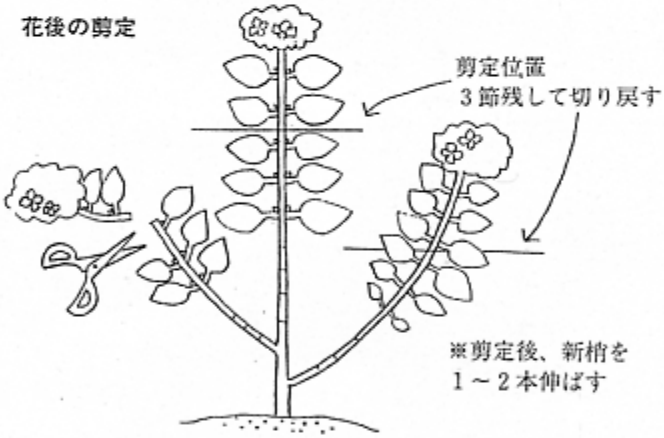
アジサイは葉の付いていない古い枝のところで切っても、節から良く発芽してくるので、開花後に枝を剪定して低く仕立て直すこともできます。

八月以降に剪定すると、枝数が充実しない間に花芽分化の時期を迎えるので花芽が付かない場合があります。良い花芽をつけるためには、枝の生育が止まって花芽分化が始まる九月下旬～十月中旬までに、新梢の生長を六～七節（葉数一二～一四枚）ある太い枝に育てることが大切です。

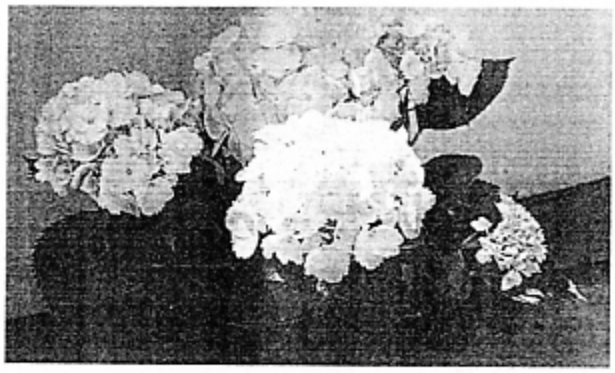
●剪定後の手入れ

剪定後、太い新梢を一～二本伸ばして、他の新梢は付け根から除きます。また、庭植えでは寒肥以外の肥料はほとんど与えませんが、剪定後の枝の充実を図るため、剪定直後に油粕と骨粉等の肥料を与えます。なお、土が乾けば十分灌水します。

花後の剪定



アジサイは、低温に遭遇すると休眠が破れ、落葉します。この時には葉芽と花芽に分かれています。先のとがっているのが葉芽で、丸味を帯びているのが花芽です。花後に間引き剪定できなかった株はこの時、花芽のついていない枝を確認して付け根から切り取ります。



ハイドランジア（品種名：ミセスクミコ）

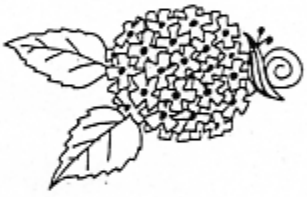
●ハイドランジアの手入れ

三月の終わりから五月にかけて出回るハイドランジアを購入された方も多いことと思います。限られた鉢土と大きい葉からの蒸散で大変乾きやすいので水やりはこまめに与えます。

また、ハイドランジアは根の生育が旺盛で、購入したままの鉢で育てると、根詰まりを起こします。花後は一回り大きな鉢に植え替えるか庭に植え替えましょう。整枝・剪定、後の管理は先述のとおり行います。

ハイドランジアの花芽は冬の低温に弱いので落葉後は霜の当たらない軒先に、庭植えの場合はこも等で囲いをして防寒します。

ご存じのとおりアジサイの花色は、培養土（PH）、肥料によって変わります。青系は酸性土壌でカリ分を多めに、赤系はほぼ中性土壌で窒素分を多めに与えます。



今が見ごろ 旬の花

花菖蒲

河江　正明

初夏を優雅に飾る花菖蒲の美しさは、たとえていえば和服姿の美女コンテストみたいなものか。一輪でよし。数株でよし。広々とした花菖蒲園でまたよし。

六月の花菖蒲園は、訪れる人の心を和ませ、それでいてときめきを感じさせる不思議な魅力で彩られます。

花言葉の「あなたを信じます」はさておき、「優雅」は、さもありなんというところでしょうか。

ところで、花菖蒲とは言いながら、ショウブとはまったくの別種で、アヤメの仲間「ノハナショウブ」から江戸時代に改良されたもので、江戸、伊勢、肥後で盛んに改良されました。

特に伊勢と肥後系は、鉢植えにして座敷にすえ、三日間の花の会を楽しむことが行われ、反対に江戸系は一部を除いて、群生で美しさを競いました。

日本最初の花菖蒲園と言われる江戸堀切の小高園は有名ですが、明治神宮に集められた品種の中には「小豆島」というのもあって、里帰りもしましたが、今はどうなっているでしょうか。

近いところでは、坂出市川津町の「かわつ花菖蒲園、六月一日から十五日まで開園」に出かけてみてはいかがでしょうか。

はなびらの垂れて静かや花菖蒲
高浜虚子